

私がそれを決断したのは、あの人の手術が決まった日だった。すぐに息子の勇樹ゆうきに電話をかけ、週末に来てくれるよう頼んだ。

「ごめんね、無理言っつて。お正月に来てくれたばかりなのに」わがままは言いたくなかったが、私も足腰が弱ってきている。息子の助けが必要だった。

「いいんだよ、母さん。美里にも、この町のいい所をたくさん見せたかったし。ちょうど稲村神社の桜も見頃でしょ？」

「うん。満開だと思うよ」

勇樹だけでいいわよ、そう遠慮したが、妻である花江さんも孫の美里も来てくれた。

「今日が快晴でよかった。じゃあ、行こう。」

二人は車で待っているから」

準備はできていた。生まれ育った町だし、目を閉じればすぐに絵は浮かぶけど、今日は何だか久しぶりにわくわくしていた。

「おばーちゃん、前に座って」

玄関を出ると後部座席の美里が窓から顔を

出していた。この春で二年生になったはずだ。

「花江さん、すみませんね。急に呼び出したりして」私は助手席に座り、後部座席の花江さんに詫びた。

「違うんです。勇樹は独りで行くよ、そう言ったんですけど。そんなのずるい、私達も連れていけて、美里と二人で抗議して。無理やりついて来ちゃいました」

こちらに気を使わせないよう、言ってくれているんだろう。勇樹が優しいお嫁さんをもたらったことは、私の大きな喜びの一つだ。

「まずは、あの丘でいいんだね？」

ちょっと恥ずかしかったけど、張り切った

私は事前に工程表を作り、勇樹に送っていた。

車は筑波山方面へと向かっていく。

「ママ、見て！自転車の人がいっぱい」

美里が興奮して声を上げた。桜川から筑波山の麓を抜けて、霞ヶ浦まで続くのがりんりんロード。自然の中を爽快に走れるこのコースは、サイクリングをする人に人気があるよ

うだ。車が小高い丘を登っていく。しばらく走って、勇樹は道端の空いたスペースへ車を停めた。我先に美里が車から降り、見晴らしのいい場所へと走っていく。私も美里の後を追った。雲一つない、透き通るような青空のもと、遠くに筑波山が見える。眼下には、田畑の沿道をサイクリングの人達が爽快に走っていく姿が見えた。

その瞬間、胸が締めつけられる思いがした。ここに来るのはいつ以来だろう。時空はわけもなく、私を数十年前に飛ばしてしまう。

（ねえ、覚えてる？）私は心の中である人へ問いかけた。あの夏、まだ小学生だった私達が初めて踏み出した冒険。海でもないのに、あなたは私のためにこだますいかを持ってきてくれて、ここに座って一緒に食べたよね。こみ上げるものをぐっと抑えて、私は遠ざかるあの日を風景と共に眺めていた。

幼馴染だけど、一つ年上のあなた。のんびり屋で、少し抜けたところもあって。でもど

こかで私をリードしてくれていた。今でもこ
だますいかを食べるとこの風景を思い出す。

「子供のころ、ここにおじーちゃんと来た
の？」美里が不思議そうに私を見上げる。

「そうね。小学五六年生くらいだったかな。

初めてのデート。そこでおじーちゃん、何て
言ったと思う？」

たまに会ってもこんな会話はしない。美里
のお喋りを一方的に聞くだけ。だから、私か
らの質問に美里は少し戸惑ったかもしれない。

「デートなら、プロポーズされたの？」

私達の後ろで、景色を見ていた勇樹と花江
さんが笑っている。

「うーくん、さすがに小学生だからプロポー
ズはされなかったけどね。ただ、俺が京子を
ずっと守ってやる、そうは言われた」

「それって、プロポーズじゃないの？」

美里の言葉にまた笑いが起こる。

「へえー、俺もそんなの初めて聞いたよ」

勇樹まで私を冷かしてくる。あながち、美

里の言ったことが真理だったりして。あの人はあの当時から、お嫁さんは私、そう決めてくれていたのかな。

「今日はいろいろ回るから、次、行こうか」

勇樹の言葉で私達は車に戻った。

桜川の中心部へと戻っていく。

「次は、曙光山ようこうざん月山寺がつきんじか。秋じゃなくて残念だけど」勇樹の言う通り、月山寺は紅葉で有名なスポットだ。お庭は枯山水を敷いていて、木漏れ日が差す楓の木々と見事な調和を形作っている。

お寺では、本堂をはじめ観音堂、新書院、鐘楼堂などを回った。

「お義母さん、このお寺は、二人にとってどんな思い出があるんですか？」

美里は勇樹の手を引いて、おみくじを買に行った。残った花江さんが興味津々といった感じで、私の顔を覗いてくる。

「勇樹には、内緒よ」誰が聞いているわけじゃないけど、少し声をひそめる。

「あの人が中学三年。私が二年の時だった。受験を控えていたから、一緒にお参りにきたの。あの日の光景は、今でもちゃんと覚えてるわ。赤とオレンジが混じっていて、空に楓の様子が映えて、とってもきれいだった。その時、ちゃんとした形で告白されたのよ。つきあってくれないかって」

「素敵！」まだ三十代の花江さんは、乙女心を残しているようだ。こんな初老の女の話に目を輝かせている。

「それで、そこからつきあったんですか？」
彼女の問いに、私は首を振った。

「私は、臆病だったのね。私とつきあうことで、受験に失敗したらどうしよう。そんなことが頭をよぎっちゃって。だからその時は、お断りした。あなたが高校に受かって、私も高校に入るまではダメって。あの人にとって、長い日々の始まり」

意地悪く、私は笑ってしまった。

「そうですね。お義父さん、そこから

一年半くらい待たなきゃいけないかったんだ」
そこで、美里と手をつないだ勇樹が戻って
くる。「おばあちゃん、大吉だよ！」嬉しそう
に美里はおみくじをひらひらと揺らしていた。
「何の話？二人でこそこそ」勇樹が疑うよ
うな目で、私と花江さんを見ている。

「女にしかわからない話。入ってこないで」
花江さんがニヤニヤしながら勇樹に返した。
「次、行こうよ」好奇心旺盛な美里が、勇
樹の手を引いていく。

「お二人の、在りし日の姿が、徐々に見え
てきた感じですね」花江さんがはにかんで笑
う。私達は月山寺を出て、近くの桜川磯部稲村
神社じんじやへと向かった。

「みっちゃん、今日はお寺とか神社に何箇
所か寄るんだ。大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。だっておじーちゃんのため
に、お願いするから」幼い子供なりに、そう
いう決意で来てくれているらしい。

「美里、ここは桜の名所なんだよ。いまち

ようど満開らしいから」

車はすぐに着いた。桜川公園では五百本もの桜が迎えてくれる。本堂への階段を美里が駆け上がっていった。

「ほら美里、鳥居をくぐる時はちゃんとお辞儀するんだぞ」勇樹も美里を追って走っていった。私と花江さんも鳥居をくぐり、狛犬の所までやってきた。青の隙間から差し陽光が、桃色の桜を煌びやかなものになっている。

「美しいですね、このフォルム」

糸桜の枝々が行儀よく頭を垂れている様だ。

美里が花江さんからスマホを借りて、その桜たちをいろんな角度から撮影している。

（あの言葉があったから、この三人がいるのよ）さっきの美里の話ではないが、ここはあの人にプロポーズされた場所。この満開の糸桜の下で、あの人は指輪と共に愛の誓いをくれた。

「恐縮ですけど、お義母さんいい表情されていますね。ここはお義父さんとの大切な場

所ですか？」女は鋭いというが、やはりそうらしい。あの人の、愛の源泉がここにある。私はただ微笑んで頷いただけ。それでも花江さんには十分伝わったと思う。

お参りを済ませ、駐車場で車に乗り込む。

勇樹は車を走らせ、踏切を渡ってますみ公園へと入っていった。ここには柘蓑ヶ池ますみがいけという大きな池がある。

いつの間にか美里は眠っていた。少し寝かせておこう、勇樹が花江さんに言う。

「ここは、勇樹も花江さんも車内にいて。みっちゃんも眠っているし。私はちよつとだけ、池を見られればいいから。」

「ここにもよく、お義父さん？」

「あの人は、決まって冬に来たの。冬になると渡り鳥の白鳥たちが、ここで翼を休めるから」私は言い置いて、車から降りた。池の方へ歩いていく。

寒いのに、私が袖を引かないと、あの人は何時間でも白鳥を見ていた。雪も、吐く息も、

そして白鳥も、すべての色を消してしまおう白が、あの人には魅力的に映ったのだろうか？今年の冬も、白鳥たちを見に来よう。あの頃のように、あなたに寄り添って、池を眺めていたいんだ。私は目を瞑り、あの人にそう呼びかけた。少しの時間、池の淵を歩いて過ごし、車へ戻る。その頃には美里も起きていて、勇樹や花江さんと何やら話をしていた。

「おばーちゃん、おかえり」

「ただいま。疲れはとれた？」

「全然平気だよ。私も池に行きたかった」
駄々をこねる美里を、花江さんがいさめる。

「ごめんね。みっちゃんが気持ちよさそうに眠っていたから。おじーちゃんとまたこの池に来られますようにって、鳥さんたちにお願いしてきたわ」

「さてさて、今度は真壁か」勇樹が割り込んで、車を発車させる。

「本当ごめんね。行ったり来たりさせちゃって」私は三人に謝る。

「でも、これって観光タクシーみたい。私もこの町を全部観たわけじゃないので、いい勉強になります」花江さんが後部座席ではしゃいでいる。

「はいはい。どうせ観光タクシーの運転手ですよ」苦笑いで勇樹がハンドルを操作する。

「真壁という所は、どういう特徴があるんですか？」花江さんが訊くから、私は勇樹の顔を見つめた。

「そりゃ、古い蔵とかあってさ。歴史的建造物っていうの。だよな？母さん」

「勇樹も桜川市で生まれ育ったんでしょ？故郷のことも、ちゃんとわかってほしいわ」

私が言うと、「パパ、そうだよ、ちゃんと勉強しなさい！」と美里が突っ込む。

「元々は戦国時代に、真壁という武将がこの辺りを治めていて。そのあと江戸時代に入ってから浅野氏が治めた。西から流れてくる木綿が、真壁で中継されて、東北へ流れていったのよ。その時の袖蔵や見世蔵なんか、

今も町として残っている感じね」

「そう、そういうこと」勇樹が大きく頷く。

「あゝあ、パパずるい。ごまかしてる」

美里に突っ込まれ、勇樹は口を尖らせた。

そうこうしているうちに、車が真壁の町並みに入っていく。

「美里、こんな古いお屋敷を見るの、初めてでしょ？」花江さんが問いかけるが、美里は窓にひつついて言葉を忘れている。都会に住む美里にとっては珍しい光景だろう。

私達は車を停めて、町を歩いた。

「みっちゃん、ここはね、ひな祭りのお人形さんをたくさん見ることができるんだよ。

古いものから、新しいものまで」

「わー、立派ですね」美里より花江さんの方が興味をそそられている。やはり女はいくつになっても少女の心をもっているのだろう。

「ここ、潮田家といって、もとは呉服商を営んでいたんだけど、いつからか古い時代に作られたひな人形を飾るようになったのよ」

美里はまた勇樹の手を引いて、あちこちに点在する見世蔵を回っている。各所にひな人形が飾られているから、小さな女の子にとつては面白い場所だろう。

「それで……高校生になった二人は、さすがにつきあったんですよね？」取材記者みたいな顔で、花江さんが私の人生を追ってくる。さっきの話をまだ覚えていたらしい。

「そうね。約束はしたんだけど、実際に高校生になるとね〜」

「えっ、だめですよ、お義母さん。お義父さんが一年半も待たたっていうのに」花江さんはすっかりあの人側についたようだ。

「でも、思わない？だったら、改めて告白してくれればいいじゃない。でもあの人、私が高校生になっても一向に伝えてくれないから。意気地なし！なんて思ったこともあるわ」

この真壁にも一緒に何度か来た。特に私はこの町並みが好きだったから。いまここから見ているひな人形も、横並びで見ていた記憶

がある。

「じゃあ結局、告白はなしですか？それじゃ、勇樹が生まれてこなくなっちゃう」

真面目に言う花江さんに、私は思わず吹き出してしまった。こんな面白い娘だとは思わなかった。

「そのあと、ちゃんとつきあったわよ。でも結局、私から言っちゃったけどね」

つきあってからも、ここ真壁には何度も足を運んだ。月光に浮かぶこの町並みは幻想的で、まるで江戸時代にタイムスリップしたみたい。だから装いも浴衣にして、二人で夜道を歩いたものだ。時代がどんどん進んでも、心に宿る古いにしえの香りが消えるものではない。

私達は昼食をとったあと、近くの五所駒ごしよこまがたき瀧神社へ寄った。ここでは毎年、夏に真壁祇園祭が催される。

「ちようちんとか、山車だまのぶつかり合いとか、結構迫力あって、すごいお祭りなんだよ」

勇樹のことは、何度かお祭りに連れてきて

いるし、学生時代には友達と行っていた。だからこの時ばかりは花江さんと美里へ熱心に説明していた。

「ここには、どんな思い出が？」

新緑の芽吹きは独特の香りを含んで、私の記憶まで刺激している。駒瀧神社は文字通り神秘的で、それを囲む樹木たちと共生しているようだ。

「あの人、時々くさいことを言うのよ」

昨日も病院へ行ったが、手術を控えたあの方は元気がなかった。二人の過去を辿り、眠っていた記憶を呼び起こせば、きっとあの方は元気なる。そう信じ、今日に至ったのだ。

「記憶の色って、薄くて曖昧だよねって。

だから京子と僕でつくる思い出は、濃い色をつけようって。その点、この桜川市は色に恵まれているの。春の桃色、夏の緑、秋の紅、冬の白。どこの町にもあるだろうけど、桜川は特に濃いと思う。そしてあの人を選んだ緑は、この駒瀧神社の新緑」

手をつなぎ参道をよく歩いた。その頃のご利益に頼って、あの人の回復を祈る。

「よし、次は雨引山だ。美里、山に登るぞ」移動は激しかったが、花江さんも美里も文句ひとつ言わずつきあってくれた。

高低差は二百メートル程の山だが、足の状態が良くない私には容易くなかった。勇樹が時々後ろから押してくれる。花江さんと美里は元気よく、ハイキング気分で登っていた。

あの人の苦しさに比べたら。そう思うと自然と足にも力がこもった。

「うわー、きれいだね」そして雨引山頂から見えた山桜の景色が、皆から疲れを抜き取ってくれたようだ。桜川市内も一望できる。

若い頃は、何度もあの人と登った山。

「ここも、おじーちゃんと来たの？」美里はペットボトルのお茶をぐいぐい飲んでいる。

「そうよ。苦しい時、悲しい時、おじーちゃんと喧嘩した時、この山に登った。汗をかいて必死に登っていると、嫌なことも忘れち

やうのよ」

「だったら、私も勇樹と喧嘩したら、ここへ登りに来ようかしら」

花江さんがまた冗談を言う。

「ダメ！みんなけんかしちゃダメ！」

美里には冗談じゃなかったらしく、途端に泣きべそをかき始める。

裸だった山々が、桃色の服を着飾っている。

そこに葉桜も混じって、見るものにコントラストを与えてくれていた。

「よし、最後は山を降りたところにある
雨引観音あまびきかんのんだ！皆さん、山は上りより下りの方が大変です。ケガも、下りの方が起きやすい。重々気をつけて」

「へえ、そうなんだ」花江さんが関心を示している。せっかくの父親の威厳に水を差しては悪いと思ったが、私は言ってやった。

「勇樹、それ、お父さんがいつも言っていたアドバイスでしょ。受け売りなんだから」

「うけうりって、なうに？」美里まで入っ

てきた。

「いいの！そうやって教えは継承されていくもんなんだよ。母さんも、余計なこと言わないで」むくれた勇樹が山を下り始める。

でも、勇樹、いやお義父さんの言ったことは間違っていないなかった。若い頃はすんなり下れたのに、足を痛めたいまは下りのほうがよっぽど怖い。私は勇樹の助けを借りて、時間をかけて下った。

登山口付近にある雨引観音に着いてからも、私はしばらく立ち上がれなかった。足をもみ、呼吸を整えてようやく落ち着いてきた。

三人には、先に行ってくれと頼んだ。

少しの間、物思いに耽りたかった。

ここはとっても大切な場所。あの人との間に命を授かって、勇樹が生まれた。安産祈願も、お宮参りも、七五三も、この雨引観音でやってもらった。私達家族にとっては、切っても切れない場所。命を授かった場所だから、あの人の命も助けて。私はそれだけを願いに

ここを選んだのかもしれない。その気持ちがあつたから、山にも登れたんだと思う。

そしてもう一つ。

あの人が愛してやまない花。

それが紫陽花だ。

さりげない装いでたたずみ、人々の活気はやや薄まる六月の雨中。損な季節の役回りを与えられた紫陽花は、めげるでもなく、雨を存分に受け入れ、その色を惜しみなくさらけだす。群生する大きな葉から顔をだし、花びらの繊維はきめ細やかに、薄くは白藍しらあゐ、淡藤あわふじ、撫子色なでしこ。見事に色づけば、杜若かきつばたや瑠璃色に染まる。「移り気」という花言葉同様、その色を次々変えていく紫陽花。寂し気なこの季節にときめきを与えてくれる。それは、ここへ来るとあの人がいつも言っていたことだ。

「おばーちゃん、大丈夫？」心配してくれた美里が戻ってきてくれた。

いろいろな思いを携えて、私は立ち上がった。

「おばーちゃん、私、桜川が好きになっち

やった。だって、お花もきれいだし、神社と
かもいっぱいあって、山登りもしたし……え
ーっと」まだ言いたいことと、整理して話す
能力が一致していない。そんな美里がたまら
なく可愛かった。

「ありがとう。みっちゃんが住む都会も便
利だけど、ここには豊かな自然がいっぱいあ
るの。そしておばーちゃんとおじーちゃんは、
桜川の豊かさをわけてもらって、生きてきた。
あなたのパパも、ママも、そしてみっちゃん
も、家族なんだから、遠慮なくこの豊かさを
味わえばいいんだよ」

いつの間にか勇樹と花恵さんも来ていた。
満開の桜は雨引観音を隠すほど咲き誇って
いる。ねえ、あなた。私を独りにしないで。
桜川の男なら、強さを見せてね。そして来年
は、家族五人でこの桜を見ましよう。

私は切なさ半分、幸せ半分の気持ちで空を
見上げた。

了